

統合失調症の症状と言えども最初に挙げられるのは幻聴であろう。当事者が自発的に記した文章をそのまま転記する¹⁾。

Case 2423

歩いているとみんな私のことを見て「こいつは気持ち悪い」「死ね」とか言って笑うのです。電車の中でも目線がみんなこっちを向いていてヒソヒソ話していません。

精神科の外来で典型的に聞かれる訴えである。当事者が「聞こえる」という体験をし、しかし客観的にはその音声は存在しないとき、その症状は「幻聴」と定義される。統合失調症の幻聴で「聞こえる」のは「声」が圧倒的に多い。上の例も、「こいつは気持ち悪い」「死ね」という「声」が聞こえたという体験をしている。このような例が多いことから、「統合失調症の症状と言えども幻聴」は正しい要約のように思える。聞こえる内容が当事者に対する悪意あるメッセージであるのもまた、統合失調症に典型的である。

しかしながら、そうあっさり幻聴と決めつけていいのかという疑問も発生しよう。「ヒソヒソ話しています」は、ただ周囲に過敏になっていてそう感じただけなのではないか。「こいつは気持ち悪い」「死ね」とか言って笑うのですも、実際に聞こえたのではなく、そう言われたと感じただけなのではないか。

それを確かめようとして、体験の具体的内容を当事者から詳しく聞き出そうとしても、曖昧な説明しか得られないことがしばしばある²⁾。一方で、はっきりと「〇〇という声が聞こえた」という体験が語られることもあるが、他方で、声の具体的内容は語られず、「〇〇という意味のことが聞こえた」という説明にとどまることも多い。特に発病初期にはむしろそのほうが普通であるとさえ言える。たとえば次のようなケースである。

Case 2074

すれ違ったときにくすくすとした笑い声や咳払いが聞こえ、陰口をたたかれました。

このように当事者が語ったとき、その陰口の内容を話すよう求めても、当事

者は口ごもり、「～というようなことが聞こえた」などという説明にとどまって、具体的にどういう文言で聞こえたかは説明できないことが多い。本当に声が聞こえたのであればその内容を、忘れてしまったのではない限りは再現できるはずだという診察者の期待は、当事者の曖昧な再現を受けて困惑に変わらざるを得ない。はたしてこれを幻聴と呼んでいいのか。だが幻聴は主観的な体験であって、聞こえたのか聞こえていないのかは当事者本人にしかわからない。本人が「聞こえた」と語っているのに対して、「本当の意味では聞こえていないはずだ」と判定する権限は誰にもない（本人が嘘をついているという可能性はここでは除外する）。体験とは専ら主観的・一人称的なものであるから、先にも述べた通り、当事者が「聞こえる」という体験をし、しかし客観的にはその音声は存在しないとき、その症状は「幻聴」と呼ばれるのである。そして、では幻聴とはどのような体験かを想像し、当事者の苦しみを察しようとするところから精神科の診療が始まる。しかし人は決して他人の主観の中に入ることはできないから、他人の体験について理解しようとするときには、自分の経験に照らして判断する以外にない。「他人の身になって考えよ」とか「他人の気持ちになって考えよ」などは日常的によく言われるフレーズだが、それはすなわち、他人を自分に置き換えてみる以外には他人の体験を追体験する方法がないことを意味している。統合失調症の当事者が「声が聞こえる」というのであれば、健常者は自分に置き換えてみて、「彼/彼女は、たとえば私に人の声が聞こえたときと同じような体験をしているのであろう」と推測する。そしてその体験を幻聴と名づける。だが幻聴という用語にとらわれず、すなわち、「声が聞こえる」という体験こそが統合失調症の典型的な症状であるという先入観を捨てて当事者の話に真摯に耳を傾ければ、われわれが「幻聴」と呼んでいる当事者の原体験は、健常者がきつこうであらうと推測する「声が聞こえる」という体験とは異なっているという実相が姿を現してくる。「声が聞こえる」と訴えているのに、その「声」の具体的な内容を語れないことがあまりに多いのはなぜか。それは、統合失調症の幻聴の「聴覚性の希薄さ」を示していることにほかならない²⁾。彼らは必ずしも聴覚で声を感知しているのではない。何らかの意味あるメッセージ（そのメッセージには悪意が込められていることが多い）を「感知」しているのである。

また当事者は「○○と言われていると感じる」と語ることもしばしばある。

「感じる」のは「聞こえる」とは違うから、幻聴の定義には合致しない。そして、「言われていると感じる」だけなら健常者にも覚えがあるから、それならわかるような気がする。過敏になっているだけだろう、自意識過剰だろう、と理解したくなる。しかしそれも多くの場合誤りであることが、経過を見るうちにわかってくる。

Case 2003

以前から、みんなが私の陰口を言ったり、容姿について笑っている気がしていました。大学ですれ違う女の子達が笑っていると、自分のことを笑っているように感じます。道ですれ違う人達が、私のことを注視しているようにも感じます。

この体験は（みんなが陰口を言っているという）「気がしている」だから、幻聴とは言えない。少なくとも幻聴の定義には合致しない。だが内容はいかにも統合失調症らしい被害妄想的なもので、このような体験はしばしば幻聴に発展し、また、明確な被害妄想にも発展するから、単なる過敏や自意識過剰として片づけるのではなく、関係念慮あるいは自己関係づけや、場合によっては妄想知覚という精神医学用語を当てることが適切であろう。このような症状（本章では関係念慮と呼ぶことにする）は、明らかな幻聴と併存することもよくある。冒頭の Case 2423 はまさにそんな例で、「こいつは気持ち悪い」「死ぬ」という幻聴とともに「電車の中でも目線がみんなこっちを向いていてヒソヒソ話しています」という体験が語られている。するとこの例には幻聴と関係念慮の二つの症状が認められるというのが正確な表現ということになるが、では「こいつは気持ち悪い」「死ぬ」という幻聴と「目線がみんなこっちを向いていてヒソヒソ話しています」という関係念慮はそれぞれが独立した別の症状なのか。二つの症状が併存することが多い場合の考え方は二通りある。一つは、ベースラインに何か共通するメカニズムがあるということ。もう一つは、一方の症状が他方の症状の原因であるということで、すなわち、幻聴が関係念慮の原因か、逆に関係念慮が幻聴の原因だと考えることである。前者は、まず幻聴という体験が生まれたために過敏になって、周囲を気にするようになったと考える。たとえばこの例なら、電車の中で周囲の人が何か話していて、少しでも自分のほうに視線が向いたのを見たとき、これは（先に体験した幻聴の内容と同じよう

に) 自分のことを何か言っているに違いないと過敏に反応したとする考え方である。後者は、まず周囲に過敏になったために、声が聞こえるという体験までに発展してしまったとする考え方である。どちらもそれなりに正しいように感じられるが、「正しそうだ」とか「そう考えれば納得できる」などという理由だけで結論に飛躍するのは危険であることは言うまでもない。幻聴とも関係念慮ともつかない、こんなケースもよくある。

Case 3115

仕事の作業中や、一人で家にいるときに声が聞こえてストレスがたまります。何を言っているのかわかりませんが、あぁまたあいつは家にいる、こっちにいるよ！ というようなことを言っている気がします。

これは、実際に聞こえた何らかの声の中に自分に関係する意味を感じ取っているのか、それとも実際にはない声が聞こえたのか。幻聴であるとも関係念慮であるとも決定することは不可能である。

Case 1291

周りの男子に馬鹿にされているような気がし始めました。内容は歩き方が変だとか、行動がおかしいというものです。廊下ですれ違ったときにこちらを見て笑っていたり、キモいなどと言われ、周囲で話している男子はみんな私の悪口を言っているような気がしました。

これも同様で、「言っているような気がする」と曖昧に表現される体験である。

Case 3115 と Case 1291 はどちらも、実際に音声聞こえたかどうかははっきりしない。しかしメッセージを感じ取っているという点では共通している。いわば「意味が聞こえている」のである。先に述べた通り、実際に聞こえる声とは聴覚性が異なるのである。これは健常者にはあり得ない体験である。統合失調症の当事者にとってもこの体験は、病気を発症する前にはなかったものである。だからこの体験に正確に対応する言語表現は存在しない。「意味が聞こえる」は日本語にない誤った表現である。文法的に正しい最も近似的な表現は「声が聞こえる」であろう。あるいは「…というような声が聞こえる」「言われ

ていると感じる、そういう気がする」のように、より控えめな表現もあり得よう。そしてこれらの表現は、一人の当事者の中でも微妙に揺れ動くことがある。

Case 2007

学内でも外出先でも、ずっとあらゆる人に悪口を言われているように感じていました。特に、「きしょい」と通りすがりに多くの人が私に対して言っているように感じていました。聞こえる笑い声は自分を馬鹿にしたものであるようでした。

「きしょい」という具体的な音声を述べているが、「言っているように感じました」という表現からは、彼女に「きしょい」が本当に音声として聞こえたのか微妙である。

Case 4012

買い物で自転車に乗って出かけたところ、全く知らない方から「そんな悪い子なのか!」「一人で寂しくないのかね～」などと自分に向かって言われているように感じるがありました。

この「言われているように感じる」という体験は幻聴なのかそうでないのか。先にも述べたように、このような場合に本当に聞こえたのか、それともそう感じただけなのかなどと本人に詳しく聞いても、曖昧な答えしか得られないのが常である。「実際には存在しない声が聞こえた」のであれば幻聴、「実際に聞こえた何らかの声を自分に関係づけた」のであれば関係念慮(または妄想知覚)とするのが精神医学の正しい用語法ということになるが、実際のケースでは両者の境界は曖昧で、しかも互いに移行するということからすれば、また、そもそも幻聴とされている症状も聴覚性が希薄なことが多いことも合わせれば、幻聴と関係念慮を截然と区別するのはあまりに形式的である。そこで、ここからはそれらをひとまとめにして仮に「幻聴系」と呼ぶことにする³⁾。すなわち、幻聴系とは、「何らかの意味のあるメッセージを、聴覚またはその周辺の感覚として感知する」という体験である。

「周辺の感覚」とは早速に曖昧な表現だが、たとえば次のような体験も幻聴系である。